

## 遠藤雄久さんの「思い出」

写真は日本ジャーナリスト会議(JCJ)『ジャーナリスト』716号、11月25日。JCJ東海の加藤剛さんが、お世話になった遠藤雄久さんの訃報を伝えている。

10月15日、遠藤さんの急逝を電話で聞き、残念でならなかった。ジャーナリスト・遠藤さんの歩みは写真に書かれているように、じつに多難なものがあった。メディアやマスコミについて、多くのことを学ばせてもらった。遠藤さんの「思い出」をすこし記しておきたい。

遠藤さんとの出会いは30数年前。JCJ東海が主催する「8・15集会」の準備だったと思う。初対面ながら、なんだか親しみを感じた。メディアや日本の現状について、厳しく指摘されていた。裁判を闘ってきた「組合活動家」というより、「理論家」のような印象が残っている。

名古屋市立女子短大の「メディア論」の非常勤講師をしていただいた。遠藤さんの講義は、学生から好評だった。退職後は、愛知淑徳大で「メディア論」担当教授として活躍された。

JCJ全国大会が名古屋で開催されたとき、私が記念講演した。遠藤さんが笑顔で講演を聴かれていたのを覚えている。その後、お会いする機会がなかったが、メールで連絡をとった。

長年にわたり『ジャーナリスト』の「月間マスコミ評」に寄稿しているが、遠藤さんから、励ましと共感の言葉もらった。ベテラン・ジャーナリストからの「エール」は、本当に心強かった。また、遠藤さんの『東海ジャーナリスト』巻頭言を読んで、共感のメールをお送りした。日本の政治やメディアの劣化に対して、鋭く警鐘を鳴らす巻頭言からも学んで、「月間マスコミ評」を書き続けていきたい。

遠藤さんとのメールの「やりとり」で最後になったのが、私の「山崎川をゆく」と題したレポートである。名古屋の東から南へ流れる山崎川について、6回シリーズで書いてきた。5月初め頃だったと思うが、遠藤さんから長いメールが届いた。私のレポートを読んで、幼き頃の山崎川の思い出を「初恋物語？」も交え書かれていた。さわりだけでも紹介したいが、その後、遠藤さんが書かれていた壇溪橋あたりを歩いて、シリーズを締めくくった。

遠藤さんから返信がなく、感想を聞けなかったのが残念である。でも、私のレポートを愛読してもらっていたのは、何とも嬉しかった。



(2017年12月2日)